

2016年11月26日

第129回山口西田読書会（2016年1月23日）

第128回（同年11月19日）のプロトコル

参加者：佐野、唐、谷、千葉、辻野、桑原、青木、山口、岡部（計9人、順不同、敬称略）

【テキスト】西田幾多郎『善の研究』4-2-1の「しからば」以降

### 1) 神人同性

神と人の関係としての宗教をどのようなものとするかを問題にしている。西田は「宗教の本には神人同性の関係がなければならぬ、即ち父子の関係がなければならぬ」とし、神は「宇宙の根本であって兼ねて我らの根本」と述べている。（4-2-1）

これに関する注意点として、『善の研究』の草稿「純粹経験に関する断章」では父子の関係を肯定的には述べていない点が紹介された。孟子の父子（五倫）ではないかとの指摘もあったが、根本とそれほど違わない「出てきたところ」というくらいの理解にとどめて読書を進めた。

これが、自己が神に帰する理由であり、直前の章（4-1-1）にあるとおり、自己は常に根本から要求される立場にある。

### 2) 人生の目的

テキストには「神は万物の目的であって即ちまた人間の目的でなければならぬ」とあり、人間の目的＝人生の目的が、そもそもあると認めるのかも含めて問題になった。

驚くべきことに、神との合一が人の究極の目的であるとの西田の記述はすでに受け入れられていた。そこでは現実を生きる個人が神に対置されて、その人生の大部分は自我、偽我、エゴなどの否定的な言葉に置き換えられる。対話は次のようであった。まず「自我を忘れたときが本当の自分である」「（より深いもの、高いものを求める）過程に大切なものがある」「ひたすら学ぶことしかない」などの考えが相次ぎ、これに「人生に目的を立てるのは自分のためではないか。人生には目的がない。内に帰るしかない」という、ニヒルでありながら能動的に現実をとらえる考えが対立した。

人生に目的はあるが自分はこれに合致しておらず、時としてそれに向かってもおらず、その受け入れがたい状態を脱すること、あるいは目的に向かうこと自体が目的化したのが前者で、後者は目的を求めることを偽我として排除し、内省に徹することを主張するが、何らかの「よりよい自分」を目指しており、その方向が「神との合一」である点では共通している。

その後「真の自己を知るのはエゴではないのか」との（後者の）意見に対し、真の自己を求めることは「人為的（随意的）なものではない」「（成果を）意識したら偽我である」などの補足がなされて話題は言語と意識から言語学、構造主義に発展していったが、一連の対話に学説上の整理を与える作業は容易でなく、これ以後は対話として発散するほかはなかったと記憶する。

### 3) 哲学的問い

はたして自己に真偽などあるのだろうか（何が偽を意識させるのか）。

※ここに至るメモ：偽我を没した人が神を求めるだろうか。偽我を没して神と合一できた人が何故また偽我に陥るのか。偽我が求めるものが神であり、神は偽我（エゴイズム）に包摂されてはいないか。独我論を脱したところに神仏は必要か。

（報告、岡部）